1 はじめに (§7.1)

- 語の意味は（多くの場合）より小さな意味要素に分解できる。
- そのような意味要素を意味の**成分** (component) という。

(1) a. 「ひよこ」＝「ニワトリ」の「子」
b. 「女子大生」＝「女子」で「大学」で学ぶ「学生」

- ある語の意味成分[*1]は、その語が含まれる文と伴立関係・前提関係を持つ。
  - その語が含まれる文が意味成分を伴立する（語彙的伴立）
  - その語が含まれる文が意味成分を前提とする（**選択制限** (selectional restriction)）
- 語の意味には、記述的意味 (descriptive meaning) だけでなく、表出的意味 (expressive meaning) ／感情的意味 (affective meaning) もある。
- 語の表出的意味は丁寧さ、親しさ、改まり、粗野さ、話者の態度などを表す。

(2) 記述的意味は同じだが、表出的意味が異なる表現
a. トイレ、便所、お手洗い
b. 食事、めし、ごはん
c. 人、やつ、方
d. 食べる、食う、召し上がる、いただく

- ここでは記述的意味のみを議論の対象とする。

2 語彙的伴立 (§7.2)

- ある語の意味が別の語の意味の一部である時、語彙的伴立関係が生じる。

(3) 「女子大生」⊂「学生」
a. 直美は**女子大生**だ。
b. 直美は**学生**だ。

(4) 「チワワ」⊂「犬」⊂「動物」
a. ポチは**チワワ**だ。
b. ポチは**犬**だ。
c. ポチは**動物**だ。

(5) 「暗殺する」⊂「殺す」
a. 1909 年、安重根は初代内閣総理大臣伊藤博文を**暗殺した**。
b. 1909 年、安重根は初代内閣総理大臣伊藤博文を**殺した**。

[*1] 厳密には、意味成分自体ではなく、もっぱらその意味成分を表す語を含む文。

3 選択制限 (§7.3)

- 共起する表現の意味に制限がある語がある。
- そのような制限をその語の**選択制限** (selectional restriction) という。

(6) 選択制限を満たさない文

a. #隣の猫はよく吠える。
b. #こちらの薬は食後に食べて下さい。
c. #健はお茶をかじった。
d. #青春が迷子になった。
e. #試験は今眠っている。
f. #“They've a temper, some of them—particularly verbs: they're the proudest…”（『鏡の国のアリス』ハンプティダンプティのセリフ）
g. 『舟を編む』（三浦しをんの小説；映画化・アニメ化もされている）

- Chomsky (1965:95) は選択制限を語の統語的特性によるものと主張したが、McCawley、Lakoff らは語の意味的特性によるものであることを示した。
- もし選択制限が統語的特性によるとしたら、(7) は言えないはず。

(7) a. 猫が吠えるということはあり得ない。cf. (6a)
b. やつは頭がおかしい。試験は今眠っていると思っている。cf. (6e)

- 選択制限は疑問文や否定文にしても保持される。
- そのため、選択制限はある種の前提だと考えられる。

(8) 【復習】前提

a. 健は恋人と別れたことを**後悔し**ている。 $\Longrightarrow$ 健は恋人と別れた。
b. 健は恋人と別れたことを**後悔し**ているの？ $\Longrightarrow$ 健は恋人と別れた。
c. 健は恋人と別れたことを**後悔し**ていない。 $\Longrightarrow$ 健は恋人と別れた。

(9) a. #隣の猫はよく吠える。[= (6a)]
b. #隣の猫はよく吠えるの？
c. #隣の猫はよく吠えない。

(10) a. #健はお茶をかじった。[= (6c)]
b. #健はお茶をかじったの？
c. #健はお茶をかじらなかった。

語彙的伴立の場合

(11) 【復習】伴立

a. カツオは波平の盆栽を割った。 $\Longrightarrow$ 波平の盆栽が割れている。

b. カツオは波平の盆栽を割ったの？ $\not\Longrightarrow$ 波平の盆栽が割れている。

c. カツオは波平の盆栽を割らなかった。 $\not\Longrightarrow$ 波平の盆栽が割れている。

(12) a. 直美は女子大生だ。 $\Longrightarrow$ 直美は学生だ。[= (3)]

b. 直美は女子大生なの？ $\not\Longrightarrow$ 直美は学生だ。

c. 直美は女子大生ではない。 $\not\Longrightarrow$ 直美は学生だ。

(13) a. 1909 年、安重根は初代内閣総理大臣伊藤博文を暗殺した。
$\Longrightarrow$ 1909 年、安重根は初代内閣総理大臣伊藤博文を殺した。 [= (5)]

b. 1909 年、安重根は初代内閣総理大臣伊藤博文を暗殺したの？
$\not\Longrightarrow$ 1909 年、安重根は初代内閣総理大臣伊藤博文を殺した。

c. 1909 年、安重根は初代内閣総理大臣伊藤博文を暗殺しなかった。
$\not\Longrightarrow$ 1909 年、安重根は初代内閣総理大臣伊藤博文を殺した。

- 選択制限は語の意味自体に関するものであり、世界の事実に関するものではない。

(14) 世界の事実に反する発話に対する反応

A: うちの猫、味噌汁飲むんだよ。

B: えー、嘘でしょ（笑）

(15) 選択制限に反する発話に対する反動

A: うちの猫、よく吠えるんだよ。

B: 猫は「吠える」じゃなくて、「鳴く」って言うんだよ。

- 伴立関係においては同じだが、選択制限が異なる語がある。

(16)

言語	概念	人	動物
ドイツ語	EAT	essen	fressen
日本語	MALE/FEMALE	男／女	雄／雌
日本語	MEAL	ごはん	ごはん、えさ
日本語	EXCREMENT	うんち	うんち、糞

4 成分分析 (§7.4)

- 20 世紀半ばまで、語の意味を弁別的な意味素性 (semantic feature) の束として扱う分析が影響力を持っていた。
- そのような分析を意味の**成分分析** (componential analysis) という。

(17)

	horse	human	child	sheep
“he”	stallion	man	boy	ram
“she”	mare	woman	girl	ewe

- 意味素性は +、− の二値を持つものを考える。
- 値が未指定の場合もある。ここでは、Øにより未指定を表す

(18) 人間を表す語の成分分析

語	[大人]	[男]
man_1/human	Ø	Ø
man_2	+	+
woman	+	−
child	−	Ø
boy	−	+
girl	−	−

Q. 以下の 4 つのお菓子を成分分析してみよう。

語	[ ]	[ ]
モンブラン		
ブラウニー		
栗きんとん		
おはぎ		

- 成分分析により意義間の関係を捉えることができる。

(19) 「息子」「娘」は「子供」の**下位語** (hyponym) である。

a. 「息子」: [+ 人間, + 子供, + 男]
b. 「娘」 : [+ 人間, + 子供, − 男]
c. 「子供」: [+ 人間, + 子供, ± 男]

(20) 「親」は「父」「母」「の**上位語** (hyper(o)nym) である。

a. 「親」: [+ 人間, − 子供, ± 男]

b. 「父」: [+ 人間, − 子供, + 男]

c. 「母」: [+ 人間, − 子供, − 男]

成分分析の問題点

1. 二値の意味素性では容易に分析できないような語彙的区別がある。
   例：ライオン、トラ、ヒョウ、ジャガー、チーター
2. 二項述語では意味素性がどちらの項についてなのか分からない。
   例：「飲む」と「食べる」は [液体] のような素性により区別される。しかし、成分分析では [液体] が目的語についてであることが分からない。
3. 親族名称や動詞では、成分だけでなく、成分の間の順序や構造が重要だが、成分分析ではそれが捉えられない。
   例：「叔母」＝「母」の「妹」≠「妹」の「母」
   「押し出す」＝「押す」「ことにより」「出す」≠「出す」「ことにより」「押す」

5 動詞の意味 (§7.5)

Fillmore (1970)

- 統語的・意味的特徴を共有する 2 つの動詞のクラス（類）が区別できる。
  - 接触 (surface contact) 動詞：hit, slap, strik, bump, stroke
  - 状態変化 (change of state) 動詞：break, bend, fold, shatter, crack
- 動詞の意味は 2 種類の要素から成る。
  1. 体系的成分 (systematic component)：動詞のクラス全体で共有され、統語的・意味的振舞いに反映される。
  2. 個別的成分 (idiosyncractic component)：個別の動詞語根に起因する。

接触動詞と状態変化動詞の違い

1. 使役起動交替 (causative-inchoative alternation)

(21) 状態変化動詞

a. John broke the window (with a rock).

b. The window broke.

(22) 接触動詞

a. John hit the tree (with a stick).

b. *The tree hit.

2. 身体部位所有者上昇 (body-part possessor ascention)

(23) 接触動詞

a. I {hit/slapped/struck} his leg.

b. I {hit/slapped/struck} him on the leg.

(24) 状態変化動詞

a. I {broke/bent/shattered} his leg.

b. *I {broke/bent/shattered} him on the leg.

3. 誘導交替 (conative alternation)

(25) 接触動詞

a. Mary hit the vase.

b. Mary hit at the vase.

(26) 状態変化動詞

a. Mary broke the vase.

b. *Mary broke at the vase.

4. 中間構文 (middle construction)

(27) 状態変化動詞
This glass breaks easily.「このグラスは簡単に割れる。」

(28) 接触動詞
*This fence hits easily.「*この塀は簡単に叩く。」

- Fillmore (1970:125)：クラスの違いから来る振舞いの違いは「状態変化」や「接触」という意味成分に起因する。

(29) a. I *hit* the window with a hammer; it didn't faze the window, but the hammer shattered. （接触動詞、[− 状態変化]）

b. *I *broke* the window with a hammer; it didn't faze the window, but the hammer shattered. （状態変化動詞、[− 状態変化]）

(30) a. *I *hit* the window without touching it. （接触動詞、[− 接触]）

b. I *broke* the window without touching it. （状態変化動詞、[− 接触]）

- Levin (1993) は Fillmore の研究をさらに発展させ、192 の英語の動詞クラスを認定した。

- 動詞の意味は構造を持つが、それを捉える方法の一つとして**語彙分解** (lexical decomposition) がある。
- 例えば、Rappaport Hovav and Levin (1998) は状態変化動詞の体系的意味成分の表示として(31) のような**語彙概念構造** (Lexical Structural Structure; LCS) を提案している。

(31) [[x ACT] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]]
（x が行為を行うことが、y が <STATE> の状態になることを引き起こす）

(32) a. *break*
[[x ACT] CAUSE [BECOME [y <BROKEN>]]]
（x が行為を行うことが、y が壊れた状態になることを引き起こす）

b. *split*
[[x ACT] CAUSE [BECOME [y <SPLIT>]]]
（x が行為を行うことが、y が裂けた状態になることを引き起こす）

6 おわりに (§7.6)

- 語の意味の成分の存在を否定する学者もいる。
- その場合、語の意味はそれ以上小さな要素に分解できない原子的要素 (atom) ということになる。
- 語彙的伴立関係は、(33) のような**意味公準** (meaning postulate) により捉えることになるだろう。

(33) a. $\forall x[\mathrm{BOY}(x) \rightarrow \mathrm{MALE}(x)]$

b. $\forall x[\mathrm{BACHELOR}(x) \rightarrow \neg\mathrm{MARRIED}(x)]$

参考文献

Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.

Fillmore, Charles. 1970. The grammar of *hitting* and *breaking*. In *Readings in English Transformational Grammar*, ed. Roderick Jacobs and Peter Rosembaum, 120–133. Washington, DC: Georgetown University Press.

Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations*. Chicago: University of Chicago Press.

Rappaport Hovav, Malka, and Beth Levin. 1998. Building verb meanings. In *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, ed. Miriam Butt and Wilhelm Geuder, 97–134. Stanford, CA: CSLI Publications.